

# 非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

## 金

### 【海外】

#### 1. 価格推移

5 月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,266.20 (31 日)	1,220.40 (9 日)
国内建値(円/g)	: 4,565 (29 日)	4,489 (8 日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 111.96 (31 日)	115.26 (11 日)

5 月の海外金相場は 2 日に\$1,255.80/toz(トロイオンス)でスタート、上旬は北朝鮮情勢の地政学的リスクの緩和や 5 日に発表された 4 月の米雇用統計での雇用回復に伴うドル高から下落基調を辿った。7 日の仏大統領選の決選投票で欧州連合擁護派のマクロン氏が勝利し、欧州リスクが後退したことも作用し、9 日には\$1,220.40 まで下落し、2 か月ぶりの安値となった。ところが、12 日を境にドルが再び弱地合いへ向きを変えたことから金は小反発、さらには 15 日にトランプ米大統領がロシア外相らに機密情報を漏らしたと複数のメディアが報じたことで米国政治の先行きに対する不安感から続伸、18 日には\$1,261.35 まで伸び、前月末以来の高値となった。

しかし、下旬に入ると、トランプ米大統領とロシアとの疑惑を巡る「ロシアゲート」で急伸した金相場が、再び米利上げへの期待が高まったことで\$1,250 台へ続落した。但し、24 日の米連邦公開市場委員会(FOMC)の議事要旨を受け、これまで年 2~3 回と見込まれていた利上げペースが年 2 回程度にとどまるとの思惑が広がったことで、金相場の下げが止まり、月末にかけて反発した。31 日には\$1,266.20 をつけ、約 1 か月ぶりの高値となるとともに月間最高値を記録して越月した。

#### 2. 為替相場推移

5 月の為替相場は 1 日に\$1=112.49 円(TTS 相場、以下同じ)でスタート、米長期金利の上昇により日米金利差の拡大を意識した円売り・ドル買いの動きが強まったため、日本の連休期間中は円安基調で推移した。5 日発表の 4 月の米雇用統計の非農業部門の雇用者数が前月比 211,000 人増えたことで、米景気の腰折れ感への警戒が緩和され、ドル高がさらに進行し、8 日には\$1=113 円水準、9 日は\$1=114 円水準へと円安が進んだ。7 日のフランス大統領選で、独立系中道候補のマクロン氏が勝利し欧州の政治リスクへの警戒感が薄められたこともドルにとってプラスに働いた。

11 日には米連邦準備理事会（FRB）による利上げペースの加速観測も出て、\$1=115.26 円まで円が続落し、約 2 か月ぶりの円安・ドル高水準となった。

その後中旬にかけては、米利上げが緩やかなペースに留まるとの見方が市場に出て、11 日の水準から円がやや反発した。18 日には、トランプ米政権によるロシア関与疑惑「ロシアゲート」を巡り今後の米政策運営に対する不安が広がったことで、円を買う動きが出て円が上昇、\$1=112 円水準での動きとなった。下旬に入っても、米政権への懸念から同水準での推移が続いた。24 日の米連邦公開市場委員会（FOMC）の議事要旨の発表を受けた米長期金利の低下により日米金利差の縮小を意識した円買い・ドル売りが入る一方で、国内輸入企業の円売りで円が伸び悩む場面も見られた。それでも、31 日は\$1=111.96 円まで円が上昇し、約 1 か月ぶりの円高・ドル安水準となって越月した。

対ユーロでは、月央に米政権への不安感から反発する場面も見られたが、月間では概ね€1=123 円水準から€1=126 円水準へ続落した。

## 【国内】

### 1. 建値推移

5 月の国内金山元建値は 2 日に 4,550 円/g(グラム)でスタート、上旬から中旬にかけて海外相場が軟調となったことで、建値も下げ、4,500 円水準を挟んだ動きとなった。下旬は、海外相場が反発、為替相場はやや円高基調だったものの、建値もその価格水準をやや上げ、29 日には 4,565 円と月間最高値をつけるとともに、約 3 か月ぶりの高値となった。31 日にはやや下げたものの、4,524 円と 4,500 円台を維持して越月した。

### 2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2017 年 4 月分=平成 29 年 4 月分)

生産	:	8,065 kg	(前月比 14.4%減、前年比 3.1%減)
出荷	:	7,545 kg	(前月比 26.0%減、前年比 29.2%減)
在庫	:	6,578 kg	(前月比 8.6%増、前年比 34.7%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

4 月の生産は前月比、前年同月比ともマイナス。出荷は前月の決算月の反動から前月比、前年同月比とも大きくマイナス。円建て価格が比較的高値だったことも影響した。在庫は 3 か月ぶりに上昇、前年同月比も再びプラスに転じた。

## 銅

### 【海外】

2017年5月のLME銅相場は、月初 \$5,746.5/t(LMEセツルメント価格、以下同じ)でスタートした後、ドル高の加速、LME在庫の急増、4月の中国の銅地金輸入が予想を大きく下回ったことを要因に下落し、8日には今年の最安値\$5,466.0/tを付けた。その後反発し、概ね\$5,600/tを挟んだ動きとなり、\$5,600/tを少し超えた水準で越月した。

米国経済をめぐることは、米連邦準備制度理事会(FRB)が5月2~3日開催の連邦公開市場委員会(FOMC)でフェデラルファンド(FF)金利の誘導目標を0.75~1.00%に据え置く決定を下した。しかし、第1四半期の景気減速は「一時的」とし、労働市場の力強さから6月にも追加利上げに踏み切る可能性を示唆した。中旬には米大統領選へのロシアの介入疑惑をめぐり特別検察官が任命されたことを受けて株価が急落した。一方、ドルは対ユーロで昨年10月以来となる\$1.12台に軟化して銅相場を下支えた。

中国経済をめぐることは、5月14~15日に北京で開催された「一帯一路」国際会議で習近平国家主席が総額780億ドル以上のインフラ投資計画を表明し、コモディティ市場の期待を煽った。一方、格付け機関のムーディーズが中国国債の格付けを引き下げ、経済の潜在成長率が鈍化し債務が増大、財政の健全性が低下するとの見通しを示し、市場の失望を誘った。

銅独自の市況要因としては、LMEワラント在庫が5月2~4日にかけて243千t急増し、在庫量も355千tへと40%急増した。大手トレーダーが中国スメルターとの委託製錬契約や長期購入契約で引き取った銅を韓国、台湾、シンガポール、ロッテルダム倉庫に持ち込んだことによるもの。しかし、31日現在311千tまで減少している。

供給障害要因としては、フリーポートインドネシアのグラスベルグ銅鉱山(インドネシア)労組が5月1日、解雇された労働者の職場復帰、レイオフの撤回を要求して1か月間の予定でストライキを開始したが、交渉が進展しないため、20日、ストを延長することに合意した。これに対し、会社側は25日、労働協約、労働法規違反で大量解雇の方針を示した。労組によれば、すでに解雇された1.1千名に加え、20日以降2千名以上がレイオフされた。同社は人員の配置転換、補充労働者の採用、鉱石在庫処理による精鉱生産の補填などを通じてストによる生産への影響の緩和に努めているが、生産量は半減状態といわれる。

アングロアメリカンは4月27日、エルソルダード銅鉱山(チリ)の生産再開計画を発表した。同鉱山は生産を維持するための操業計画変更許可申請がチリ鉱山地質局に却下されたため、2月17日に生産を停止したが、計画を見直して承認が得られた。第1四半期の生産損失は3千t。

また、フリーポートマクモランのセロベルデ銅鉱山(ペルー)労組は、5月2日の組合員大会で、会社側が3月のストに参加した労働者への制裁処分を継続した場合には、無期限ストライキを再開する方針を満場一致で採択した。労組は3月10～30日のストに参加した労働者の一部が停職処分を通告されたことに抗議している。

一方、ミネラコジャワシとコジャワシ銅鉱山(チリ)労組は5月5日、労働協約更改交渉に合意し、ストは回避された。現行協約の有効期限は今年10月だが、交渉は4月17日に前倒しで開始された。

コデルコとサルバドル銅鉱山(チリ)の管理職労組は5月10日、新労働協約に合意し、ストライキは回避された。

需給動向については、国際銅研究会によれば、2017年1～2月の世界の銅鉱石生産は前年同期比1.9%減3,060千t、地金生産は横ばいの3,757千t、消費は3.5%減の3,608千t、この結果、地金需給バランスは前年同期の+44千tから+149千tへと供給過剰幅がやや拡大した。報告在庫は8.6%減の1,450千t、在庫/消費比率は3.4週間から3.2週間に低下した。

鉱石生産の内訳は精鉱が1%減少、SXEWは5%減少した。国別にはチリがエスコンディーダ鉱山のストライキとコデルコの鉱石品位低下の影響で10%減少した。カナダとモンゴルは低品位鉱体へのシフトの影響でそれぞれ19%、23%減少した。インドネシアは一時的な精鉱輸出禁止により生産が抑制された。メキシコ、ペルーは鉱山の新設、増強によりそれぞれ18%、ペルーは15%増加した。地域別にはヨーロッパが5%、オセアニアが10%増加、アメリカは4%、アフリカは6%減少、アジアは横ばいであった。鉱山稼働率は83.5%から78.6%に低下した。

地金生産の内訳は一次生産が3%減少、二次生産は11%増加した。二次生産はスクラップ供給の増加を背景に増加した。とくに中国は2016年第4四半期以降増加傾向を辿っている。国別には中国が4%増加、メキシコはSXEW生産能力の増強により14%増加した。しかしながら、チリは電解、EW生産ともに減少し合計で16%減少した。日本、米国も減少した。地域別にはアジアが3%、アフリカは2%、ヨーロッパは1.5%増加したが、アメリカは11%、オセアニアは5%減少した。精製工場の稼働率は86.7%から84.0%に低下した。

地金消費は中国を除く世界合計が2.5%増加し、中国の見掛け消費の減少を相殺した。中国の見掛け消費(未報告在庫の増減を除外)は9.5%減少した。国内生産が4%増加したが、ネット輸入が29%減少したことによる。地域別にはヨーロッパが1.5%増加したが、アメリカは1%、アジアは5%減少(中国を除くアジアは6%増加)した。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

5/8 670    5/16 680    5/19 660    5/24 680    5/29 670

### 2. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2017年4月分=平成29年4月分)

生産 : 118,009t (前月比 10.9%減、前年比 8.1%減)

出荷 : 131,983t (前月比 8.9%減、前年比 4.6%増)

在庫 : 93,014t (前月比 3.3%減、前年比 6.3%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

平成29年(2017年)4月の銅地金生産は前月比10.9%減、前年同月比8.1%減の118.0千tと直島製錬所の定修を主因に前月比が3か月ぶりの減少となった。出荷は前月比8.9%減、前年比4.6%増の132.0千tで、それぞれ3か月ぶりの減少と2か月連続の増加。内訳は内販が前月比1.7%減、前年比4.1%増の87.1千tで前月比は3か月ぶりの減少、前年比は9か月連続の増加、輸出は前月比20.3%減、前年比5.5%増の44.9千tで前月比は3か月ぶりの減少、前年比は4か月ぶりの増加。内販のうち電線向けは前年比0.8%減の50.3千tでほぼ横ばい、伸銅品向けは前年比15.2%増の33.6千tと11か月連続の増加。在庫は前月比が3か月連続、前年比は3か月ぶりの減少となった。

### 3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、平成29年(2017年)4月の銅電線出荷は前月比10.5%減、前年同月比0.3%増の56.2千t(推定)と2か月連続の前年同月比増となった。うち内需は前年比0.2%減の54.7千tで2か月ぶりの減少、輸出は18.8%増の1.5千tで2か月連続の増加。内需の部門別には、自動車<sup>が</sup>12か月連続、電気機械とその他内需は6か月の連続の増加となったが、建設電販は5か月連続、電力は8か月連続の減少、通信も再び減少した。

なお、平成28年度(2016年度)の銅電線出荷量は前年度比2.7%減の680,196tとなり2年連続の対前年度減少となった。内需が同2.1%減の663,357t、輸出向けが同23.0%減の16,839tだった。

日本伸銅協会によれば、平成29年(2017年)4月の伸銅品生産は前月比4.2%減、前年同月比6.9%増の70.8千t(速報)と前年比は9か月連続の増加となった。うち内需向けは前年比4.3%増の57.8千tで9か月連続、輸出は19.9%増の12.9千tで6か月連続の増加。品種別には、半導体、コネクタ、自動車端子向けの銅条が12か月連続、コネクタ向けの青銅板条は8か月連続、自動車端子向けの黄銅条は4か月連続、エアコン向けの銅管は2か月連続の増加となった。

なお、平成28年度(2016年度)の伸銅品生産量は前年度比4.3%増の793,100t

となり2年ぶりの増加となった。内需が同 3.9%増の 657,803t、輸出向けが同 6.5%増の 135,297t だった。

## 鉛

### 【海外】

2017年5月のLME鉛相場は、月初 \$2,250.0/t(LMEセツルメント価格、以下同じ)でスタートした後、強気材料が乏しい中、弱含みに推移し、中旬には年初以来の安値圏となる\$2,000 台まで下落し、31日に\$2,075.5/tをつけて越月した。

米国経済をめぐっては、米連邦準備制度理事会(FRB)が5月2~3日開催の連邦公開市場委員会(FOMC)でフェデラルファンド(FF)金利の誘導目標を 0.75~1.00%に据え置く決定を下した。しかし、第1四半期の景気減速は「一時的」とし、労働市場の力強さから6月にも追加利上げに踏み切る可能性を示唆した。中旬には米大統領選へのロシアの介入疑惑をめぐり特別検察官が任命されたことを受けて株価が急落した。一方、ドルは対ユーロで昨年10月以来となる\$1.12 台に軟化して鉛相場を下支えた。

中国経済をめぐっては、5月14~15日に北京で開催された「一帯一路」国際会議で習近平国家主席が総額780億ドル以上のインフラ投資計画を表明し、コモディティ市場の期待を煽った。一方、格付け機関のムーディーズが中国国債の格付けを引き下げ、経済の潜在成長率が鈍化し債務が増大し財政の健全性が低下するとの見通しを示し、市場の失望を誘った。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2017年1~3月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比18.4%増の1,310千t、地金生産は10.0%増の2,940千t、消費は12.3%増の2,984千t、地金需給バランスは前年同期の+15千tに対し、▲44千tとなり、ほぼバランスした。

鉱石生産はアジアが35.2%、ヨーロッパは4.8%、アフリカは4.5%増加したが、アメリカは横ばい、オセアニアは9.9%減少した。国別には中国、インド、カザフスタンの増加が目立った。地金生産はアジアが16.1%、アメリカは1.2%、オセアニアは1.1%増加、ヨーロッパとアフリカは横ばいであった。中国、インド、韓国、米国が増加した。地金消費はアジアが15.9%、アメリカは12.2%増加、ヨーロッパは横ばい、アフリカは7.7%、オセアニアは20.0%減少した。中国、米国が増加。3月末の地金の報告在庫は前年同月比15.4%増の526千t、在庫/消費比率は2.2週間で横ばいであった。

中国は鉱石生産が33.6%増の692千t、鉛精鉱輸入は5.5%減の172千t、地金生産は21.4%増の1,281千t、地金の輸出入は9千tのネット輸出から25千tのネット輸入に転じた。この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は

21.5%増の 1,262 千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

4/12 309    4/20 292    5/2 312    5/11 307    5/18 295    5/25 290

5月 は LME 鉛相場が月央にかけて下落したことで鉛建値も低下した。

### 2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2017年4月分=平成29年4月分)

生産 : 17,021t (前月比 46.1%増、前年比 3.1%減)

出荷 : 16,773t (前月比 7.1%減、前年比 0.8%増)

在庫 : 9,069t (前月比 2.6%増、前年比 58.5%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

4月の生産は契島製錬所での定修明けにより前月比大幅増となったが、前年同月比は6か月連続の減。出荷は蓄電池の需要期終了により3か月連続の前月比減だが、前年同月比は4か月連続の増。補修用の蓄電池需要が伸びていることから好調さを維持している。在庫は生産増、出荷減から8か月ぶりに上昇したが、前年同月比は19か月連続の減。

### 3. 需要部門動向

4月の自動車生産台数は前年同月比 16.3%増の 749,087 台となり、6か月連続で前年同月を上回った。乗用車は前年同月比 6か月連続でプラス、トラックは同2か月ぶりのプラス、バスも同2か月ぶりのプラス。

大手自動車メーカーが昨年4月の熊本地震の影響で生産を一部停止したため、その反動が数字を押し上げた。

4月の自動車輸出台数は前年同月比 0.7%増の 371,827 台となり、3か月連続で前年同月を上回った。

一方、4月の二輪車生産台数は前年同月比 34.9%増の 54,705 台と7か月連続で前年同月を上回った。

(一社)電池工業会の調査によると、4月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で 2,302 千個(前年同月比 4%増)と5か月連続で増加、自動車用以外の鉛蓄電池も 756 千個(同 4%増)とこちらも2か月連続で上昇した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで 3,058 千個(同 4%増)と6か月連続で増加した。今年に入り堅調に推移している。

## 鉛関連製品生産統計

		3 月	4 月(速報値)
自動車	数量(台)	929,963	749,087
	前年同月比(%)	104.5	116.3
		2 月	3 月
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	16,751	17,866
	前年同月比(%)	104.2	110.1

(出所: (一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

2016 年度(平成 28 年度)計: 自動車用鉛蓄電池 188,615 鉛量 t(前年度比 1.3% 増、3 年ぶりに前年度比プラス)

## 亜鉛

### 【海外】

2017 年 5 月の LME 亜鉛相場は、月初 \$2,639.5/t(LME セツルメント価格、以下同じ)でスタートした後、銅相場安の流れを受けて下落し、18 日には今年の最安値 \$2,460/t をつけた。その後回復し、31 日に \$2,572.0/t をつけて越月した。

米国経済をめぐることは、米連邦準備制度理事会(FRB)が 5 月 2~3 日開催の連邦公開市場委員会(FOMC)でフェデラルファンド(FF)金利の誘導目標を 0.75~1.00% に据え置く決定を下した。しかし、第 1 四半期の景気減速は「一時的」とし、労働市場の力強さから 6 月にも追加利上げに踏み切る可能性を示唆した。中旬には米大統領選へのロシアの介入疑惑をめぐり特別検察官が任命されたことを受けて株価が急落した。一方、ドルは対ユーロで昨年 10 月以来となる \$1.12 台に軟化して亜鉛相場を下支えた。

中国経済をめぐることは、5 月 14~15 日に北京で開催された「一帯一路」国際会議で習近平国家主席が総額 780 億ドル以上のインフラ投資計画を表明し、コモディティ市場の期待を煽った。一方、格付け機関のムーディーズが中国国債の格付けを引き下げ、経済の潜在成長率が鈍化し債務が増大し財政の健全性が低下するとの見通しを示し、市場の失望を誘った。

亜鉛独自の市況要因としては、中国の SHFE 在庫が 3 月最終週末の 183 千 t から 5 月第 4 週末現在 78 千 t まで減少している。また、5 月半ば以降、SHFE/LME のアービトラージ・ウインドウが開き、26 日現在、SHFE 価格が LME 価格を \$113 上回っている。更に、4 月の亜鉛地金輸入が前月比 85% 増の 47 千 t と前年 3 月以来の高水準を記録した。これらは中国の亜鉛需要回復の兆しとの見方もある。

供給障害要因としては、グレンコアが 5 月 4 日、オーストラリア、ペルーの亜鉛鉱



山を再開する計画はないと発表した。2017年の生産予定 1.19 百万tは変更しない。2016年の生産実績は 1.094 百万t。同社は 2015年10月、亜鉛価格の低迷を理由に生産能力 500 千 t/年を休止した。具体的には、イスカイクルス鉱山(ペルー)、レディロレッタ鉱山(豪)の操業を停止し、ジョージフィシャー、マッカーサーリバー鉱山(豪)、カザフスタンの鉱山の生産を削減した。

カナディアンエレクトロリテックジンク(CEZ)のバレーフィールド亜鉛製錬所(加)では労組が年金問題をめぐり2月12日からストライキを継続しているが、5月13日、仲裁人を交えた労使交渉を行った。しかし、主要な目的はストライキの近況報告で、労働条件は議論されなかった。同製錬所は3月1日以降 50~60%の稼働率で操業を継続している。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2017年1~3月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比 11.3%増の 3,298 千t、地金生産は 2.7%増の 3,406 千t、消費は 2.9%増の 3,412 千t、地金需給バランスは前年同期の +3 千tに対し▲6 千tとなり、ほぼバランスした。

鉱石生産はアジアが 16.1%、アメリカは 4.4%、ヨーロッパは 6.0%、オセアニアは 10.6%、アフリカは 24.4%増加した。国別にはオーストラリア、カナダ、中国、エリトリア、インド、ペルー、トルコなどが増加した。地金生産はアジアが 3.7%、ヨーロッパは 3.2%、オセアニアは 5.1%増加、アフリカは横ばい、アメリカは 3.7%減少した。中国、インド、ノルウェーが増加したが、カナダの減少に相殺された。消費はアメリカが 30.3%、オセアニアは 6.7%、アフリカは 9.5%増加したが、アジアは横ばい、ヨーロッパは 1.2%減少した。米国は輸入の急増により見掛け消費が増加した。3月末の地金の報告在庫は前年同月比 6.3%減の 1,357 千t、在庫/消費比率は 5.6 週間から 4.9 週間に低下した。

中国は鉱石生産が 8.1%増の 1,204 千t、亜鉛精鉱輸入は 10.8%増の 268 千t、地金生産は 2.1%増の 1,486 千t、地金のネット輸入は 69.3%減の 176 千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は 3.1%減の 1,509 千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

4/24	334	5/8	337	5/11	346	5/16	340	5/19	331	5/25	346
6/1	337										

5月はLME亜鉛相場が月央にかけて弱含んだため下落したが、月末近くに上昇した。

### 2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2017年4月分=平成29年4月分)

生産 : 37,934t (前月比 6.6%減、前年比 18.0%減)  
出荷 : 44,232t (前月比 15.4%減、前年比 0.5%増)  
在庫 : 63,577t (前月比 10.3%減、前年比 19.2%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鋳業協会受払)

八戸製錬所の大規模定修の影響で、前月比、前年同月比とも3か月連続の減。出荷は決算月が過ぎたにもかかわらず、ユーザーのゴールデンウィーク前の手当てで内販は堅調に推移した。その分、定修による生産減で輸出は大幅減。前月比は輸出減でマイナスとなったが、前年同月比は2か月連続の増。在庫は出荷増から前月比、前年同月比とも3か月連続の減。在庫レベルは2014年(平成26年)10月末の60,684t以来の低水準。

### 3. 需要部門動向

4月の鋳工業生産指数は前月比4.0%増、前年同月比5.7%増の103.8(速報値)となった。前月比は2か月ぶりのプラス、前年同月比は6か月連続のプラスとなった。国内販売が好調な乗用車の増産などがけん引し、消費増税前の駆け込み需要が発生した2014年(平成26年)1月実績(103.2)を超えてリーマン・ショック後では最高水準となった。だが、経産省は生産の基調判断を「持ち直しの動き」に据え置いた。

4月の生産指数は15業種のうち11業種が前月から上昇し、4業種が低下した。輸送機械工業が前月比10.8%上昇したほか、はん用・生産用・業務用機械工業が同9.2%、電子部品・デバイス工業が同5.2%それぞれ上昇した。

4月の出荷指数は前月比2.7%増の101.1と2か月ぶりにプラスに転じ、前年同月比も4.9%増と6か月連続のプラスとなった。

一方、在庫指数は前月比1.5%増の111.3と5か月連続で上昇。在庫率指数も前月比2.9%増の114.7と2か月連続で上昇した。

大企業の実績見通しを示す製造工業生産予測指数では、5月が前月比2.5%の低下、6月は同1.8%の上昇を見込んでいる。

3月の亜鉛めっき鋼板生産(次工程用消費を除く)は5か月連続で前年同月比プラスとなった。しかし、数量は30か月連続で100万t台割れ。2016年度(平成28年度)は前年度比0.4%増の10,489,844tと3年ぶりに前年度実績を上回った。

3月の伸銅品生産量は73,887t(確報値、対前年同月比+8.0%)(対前月比+9.2%)、2016年(平成28年)8月から8か月連続の対前年同月比プラス(1月+5.3%、2月+3.1%)。単月では2010年(平成22年)10月(74,079t)以来の高水準となった。黄銅板、黄銅管、洋白その他棒線を除く全ての品種が対前年比プラスとなった。銅条は11か月連続の対前年比プラス。銅管は2か月振りの対前年比プラス。内需向けは60,557tで、8か月連続の対前年比プラス(+5.8%)。輸出向けは13,330tで、5か月連続の対前年比プラス(+19.4%)。

黄銅製品では、黄銅条が9,182t、3か月連続のプラス、黄銅棒は17,131t、11か月連続の対前年比プラスとなった(+1.5%)。黄銅棒は2011年(平成23年)7月(17,374t)以来の高水準。

2016年度(平成28年度)の伸銅品生産量は前年度比4.3%増の793,100tと2年ぶりの増加となった。このうち、黄銅製品生産は333,683tと3年ぶりの増加だった。2016年度の亜鉛ダイカスト生産は6年連続の前年度比減、亜鉛華は2年ぶりの増加となった。

#### 亜鉛関連製品生産統計

		2月	3月
亜鉛めっき鋼板	数量(t)	860,260	974,908
	前年同月比(%)	103.3	108.1
黄銅製品	数量(t)	28,179	30,264
	前年同月比(%)	101.8	101.1
亜鉛ダイカスト	数量(t)	1,492	1,980
	前年同月比(%)	100.3	118.6
亜鉛華	数量(t)	5,307	6,446
	前年同月比(%)	114.0	120.0

(出所:経済産業省生産動態統計調査)

2016年度(平成28年度)計:亜鉛めっき鋼板 10,489,844t(前年度比0.4%増)、黄銅製品 333,715t(同3.8%増)、亜鉛ダイカスト 18,858t(同5.5%減)、亜鉛華 59,012t(同0.9%増)